

第三章 中国の宗教

全体的俯瞰

中国におけるおもな宗教は三つ、儒教・道教・仏教である。

これらは三つの独立した宗教というよりは、一つの機能システムのパーツである。

中国宗教は思想や制度、儀礼や思考の混合物であるため、西洋人には分かりにくいので、まずは言葉の定義から始めることにする。

- ・「仏教」とは実質的な組織をもつ宗教団体で独立した組織である。
- ・「道教」も同じく独立した組織で宗教的専門家集団である。なお老子や荘子に始まる伝統知識を述べる場合は「老荘学」という言い方をする。
- ・「儒教」は辛亥革命後に影響力失った国家祭祀を言及する場合に用い、哲学的伝統を述べる場合は「儒学」とする。

儒者階級ないし士大夫、仏教寺院、および道観という三組織は国家の寵遇を求めて争った。しかし同時に景教、マニ教、ゾロアスター教、ユダヤ教、イスラームも活躍した。うちイスラームが最も強力な跡を残し、近代ではキリスト教の宣教師たちが教育の分野で影響を与えた。

中国宗教史の時代区分

今日知られる中国の歴史は紀元前 8 世紀、東周の時代からであり、孔子が古典の素材としたのはこの時代である。

孔子は紀元前 5 5 1 年から 4 7 9 年までの生涯であり、老子はやや年長の同時代人であった。さらに続く数世紀の間に儒教および道教の思想の伝統において重要な人物である孟子や荘子が活躍した。

西暦 1 世紀には仏教が中国に定着し、2 世紀には張道陵が宗教システムとしての道教を創始した。故に 2 世紀以前は草創期ないし上古とみなすべきである。次いで、儒教、道教、仏教の三つの宗教が基本的な形を整え、中国仏教が仏教の思想と実践に大きな貢献を行った 1 0 世紀にいたる。1 1 世紀から西洋の影響が及ぶ 1 8 世紀末までを中世もしくは前近代と呼ぶことが出来るだろう

中国文化の影響は古代ではヴェトナム、朝鮮、日本などに及び、1 9 世紀には大量の中国人がアメリカ合衆国、西インド諸島、インドネシア、マレーシア、シンガポールに移住した結果中国の文化・宗教がこれら諸国にも見られるようになった。

基本的な思想と実践

1) 儀礼のレベル...行事・儀礼の次元

一つは「礼」の概念。儀礼的な行動、あるいは音楽を含む広い意味での儀礼であり、孔子の哲学において決定的であった。

二つ目は皇帝の祖先や氏神の廟などの家庭における祖先の崇拜である。

三つ目は占いである。また、神秘主義的なものもある。

2) 経験のレベル...経験的・感情的な次元

「道」すなわち自然のありかたに従うことで、自然との調和・同一化の経験を目指すこと。

民衆の宗教においても霊媒型の宗教が盛んで、神々の世界のビジョンにも関心が向けられた。

3) 教義の面...教義的・哲学的次元

「天」の概念が重要視された。時には抽象的な天命として取り扱われ、時には人間的な神として取り扱われた。統治者の支配を正当化するときにも使われた。

宇宙論においては中国の歴史を一貫して「陰陽五行」による分類が使われた。

4) 中国文化の物語と神話の次元

孔子の一生や老子の物語、仙人など非常に豊富だったが、社会的に、学者（儒）にとっては聖人の姿が理想として重要だった。なお儒教倫理の多くは家族関係を巡るものであり、仁者による博愛の心の道徳である仁とが重んじられたが、それは無為に対する感心などいくつかの宗教の間で退避されて存在していた。

5) 物質的なレベル...有形的な次元

絵画の巻物やいくつもの芸術を一緒にする行為から、ある種の境の無いダイナミズムが中国文化に流動性を与えている。

草創期

孔子の教えと生涯

中国文化に残した影響の大きさから、孔子から始めることが妥当。彼の言説は『論語』によって後世に伝えられた。

彼は学苑を全ての人に開放するなどの道徳的行動から、「君子」の概念の規範となり、古典の編纂者として定められたことにより、中国の官僚の指針ともなった。

孔子は政治的統治、正義の行動、人間の本質に深い関心を保ち、ずっと後に至るまで続く中国思想の主題を定めた人物だといえる。

孟子・荀子・韓非子

孔子の継承者には聖人による王道政治を訴えた孟子が居た。彼は人は本質的には善であるとする「性善説」に拠って、仁・義・礼・智の気質とそれを推奨する信の力を唱えた。

対照的に荀子は人の本性は本質的に無秩序かつ悪であるとする「性悪説」を取り、それを制御するために教育が必要であると説き、儒教における礼の力を強調した。

諸子百家の中で荀子と共に学んだが、儒家の道徳を否定した韓非子が居る。彼は人を制御する最善の方法は道徳ではなく法律であるとの考えを法家として主張した。

老子と道家の伝統

「道」とは世界に遍満し宇宙の起源である根源的で言語に絶する原理のことである。そして、「道」と関わるのは「無為」の力でありこれは、何もしないことによって成立する。

道教の思想は、活動しないこと。自然であること、ありのままであること、受身であることを強調する。能動的、実用的、慣習的な儒教の思想と対照的に道教の思想は静観的、無秩序的、直線的である。

そして、これらの考えは荘子によって展開された。全ての二元性は人間によってもたらされたものであり、万物に浸透する静かな精神である「道」を個人的に追求していかねばならないというものである。

道家の思想は、のちの中国の氾濫のイデオロギーを与えたことについても触れられていて、それは聖人の描写を通じて国家に不思議な力の搜索をさせるような点である。

こうして中国の3宗教がそれぞれの土着宗教と融合して19世紀に分離するまで長期にわたって中国で機能した宗教体勢を形成した。

古代

儒教の体制化

儒教思想は統治者にとって理想的であった。それは統治を正当化する伝統主義を取っていたからである。そして、儒教が制度化されたのは西暦一世紀の漢王朝においてであった。それには董仲舒による孔子の教説と宇宙の成り立ちを合わせた天人相関思想を大成して階層的な人間関係が中国に浸透したのである。

宗教としての道教の出現

草創期の道家の思想は道教の一要素となったが、もう一つの大きな構成要素は張道陵による教団の組織化である。道教の組織には、黄巾の乱をおこして曹操に滅ぼされた張角の太平道や、張魯の天師道なども形成され、さまざまな神格の礼拝と共に発達を遂げた。

道教では太平道の叛乱失敗の結果、ユートピア的な教えの体言は内面に求められ、同時

に伝統的な不老不死への感心は漢方医学の発展に繋がるように、進歩していった。

仏教は道教と大いに関係があった。お互いに攻撃するよう経典などを製作したり、逆に相手の宗教のエッセンスを取り入れる場合もあった。

仏教の中国伝来

仏教はチベットの北方を通して1世紀には中国にもたらされており、その存在感ゆえに広がっていった。仏教用語の翻訳には道教の用語が使われることが多かった。

カルマと輪廻の概念は中国人には異質だったがそれも中国流に使用され極楽往生の概念も変化を遂げた。結果中国で発達した特徴的な宗派は、「天台宗」、「華嚴宗」、「禅宗」であった。

天台宗

智顗が天台山に重要な僧院を開いたのにちなんで命名された宗派。難問であった仏の教えは順に人間に開示され、法華経において最も明瞭かつ荘厳に提示され、さまざまな教説を異なる時代に割り当てという、主要な仏教経典全体の配列を統合しようとする企てであった。日本でも重要になった天台宗は中国でも有力であった。

華嚴宗と諸事物の関係性

西暦600年より前に始まった宗派で唐の法蔵が『華嚴経』に拠って大成した。

華嚴の教えは全ての現象と原則は相関関係にあり、個々の固体識別性を失うことなく完全に相互に浸透すると認識する。宇宙の相関関係を楽しく美しく描き、仏教の中心的教義の中国的色彩を代表している。

中国的な道としての禅宗

禅宗は華嚴宗的な思考の形から影響を受け、開祖である菩提達磨は道教の不死の仙人と同化されて中国に根付き、後に韓国や日本にも伝わることになる。

禅宗には仏教思想と道教思想の見事な融合がある。

浄土教と観音菩薩

成熟した大乘仏教はさまざまな信心の機会を供与した。仏陀は応身仏・報身仏・法身仏の三様を持つ。この中で特に報身仏は7世紀に盛んであった浄土教の運動とその信心への焦点付けが合致し、中国においては女性の神として観音菩薩として出現した。

観音菩薩は道教の不老不死の老人への信心を補完するものとなり、末世に向けた簡単な仏教、つまりは易行道の宗教だったのでより信心が集まった。

仏教徒と道教はお互いに相手の宗教の神々を自身の宗教の神が支配していると主張しあったこともあり、仏教が大弾圧されたこともあるが歴史の大半を通じて儒教・仏教・道教の3宗教は共生してきた。

中世

新儒教の再興

儒教はその関心を政治・倫理を中心に向けていたが、精神的関心を満たす仏教・道教とは差が開いてしまった。その中で理学（新儒教）と呼ばれる運動がおき、儒教における思想と実践の差を埋めることになった。

先駆者は韓愈。特徴の一つは直裁的で教育的だったことであり、五大儒の著作によって纏められたことが大学者朱熹によって纏められることになる。諸原理の背後にある動の原理「理」が採用された。これは偉大なる究極性すなわち「太極」から発するもので、これは第一原理であり時間および空間を越えているが、創造された秩序中の全ての個別類型を決定する力を秘めているもののことである。

全てのものは「理」という形而上の道と「気」という形而上の器からなっていて、前者が論理的に先行する。そして、居敬窮理を提唱する朱熹は仏教の化身論と道教の不老長寿の探求を強く反対した。

王陽明 道徳的理想主義

王陽明は理学におけるもう一人の巨人で、彼は外からの探求である朱熹の「格物致知」を強調せずに知識の実存的な特徴に関心を持っていた。そのなかで、性善説と万物の根本原理の一致を弁護した。

新儒教におけるこうした諸概念は仏教に対する独自の反応であった。四書五経が中国文化の中世において教育ある人々の世界観の主たる内容を与えたのだが、これらの概念はその正しい解釈を巡る論争の場を設定したのだ。

中世の中国宗教の諸次元

1) 行事と儀礼の次元

- ・ 地方の諸寺院では独自の祭礼のリズムを持つ個別の神々の所在地
- ・ 国家祭祀のための公的施設、有名な道観や仏寺および僧院の複合体
- ・ より良い後世の保障のための信心としての礼拝がもっとも強力な推進力を持っていた
- ・ 道教の道士、仏教の僧侶のいずれもが執行した葬式における後世への象徴的移行
- ・ 新年、竜王祭、収穫祭、墓祭り、死者のための清明、施餓鬼など全中国的リズム

- ・ 宗教者や出来事との関連を由緒付けられる霊山への頻繁な巡礼
- ・ 道教や仏教の神々や祖先に対しての供物など家庭内での儀礼

2) 経験的・感情的次元

- ・ 偉大な諸仏諸霊への感謝と傾倒の感情
- ・ 瞑想などのより高い精神的レベルへの向上（仏教・道教両方で）
- ・ 真剣に受け止められるお告げはシャーマンの経験
- ・ 道教における自然との融和を取り込んだ新たな解脱（禅宗において）

3) 物語ないし神話的次元

- ・ 周公旦や黄帝の物語、孔子・老子など聖人の電気
- ・ 中国においては歴史が神話的な次元に含まれていた

4) 教義的・哲学的次元

- ・ 「天」の主題から「太極」信仰への展開（「空」「道」よりは否定的な響きの概念）
- ・ 「陰陽五行」など究極なるものに支配された宇宙観
- ・ 後世（死後の生）については豊かな諸見解があったが靈魂の再生については不定
- ・ 道教の中では後世への関心は呪術的錬金術と修行の果てに達成される不老長寿への関心へと変換されていった

5) 倫理的・法的次元

- ・ こと中世において道徳的思弁を復興したことで議論が活性化
- ・ それぞれの倫理は統合されなかったが、包括的なイデオロギーとして世界観を補強した・中国的多元性と弁証法的施行によって巨大な社会は安定していた

6) 社会的・制度的次元

- ・ 三つの伝統の併存
- ・ 道教は道観、仏教は僧院、儒教は官僚組織そのものだった

【疑問と意見】

何故宗教戦争が発生しなかったのだろうか？

三つの異なる宗教が共存できた理由は一体なんだろう？

私個人の意見は、民衆が宗教との関わり自体が遠かったのではないかということである。

民衆はそのときどきに合わせて宗教を選択するような風土だったのではないだろうか。国家による宗教の弾圧はたびたびあったが、中国における三大宗教が消滅することは無かった。これはそれだけ民衆の中に三宗教がしっかりと根付いていたからであろう。逆に時の支配民族の交代とともに、宗教を弾圧するのは、支配民となった人々にとっての効率的な弾圧となるからかもしれない。

そして、なぜそこまで深く民衆の中に三宗教が根付いていた原因として挙げられるのは中国の民衆に信仰の基礎はシャーマニズムと祖先崇拜であった。これはアジアの民衆にもいえることで、それは中国の文化の伝播とも関係があるのだろう。

この点から考えたことは、中国において民衆は外部や指導者からもたらされた宗教を独自の価値観に捉えなおしていたのではないかという点である。イエズス会のキリスト教が中国に入ってきたときも、民衆に布教する際には祖霊崇拜を認め、中国において分かりやすい表現で教義を説明したという話である。このことは中国の民衆が独自の形で宗教をバランスよく取り入れていたことの証左になるであろう。